16　　困った色好み　　　　　　　　　　　　　　　文法　敬語②　二方面への敬語

読解　発言の趣旨をつかむ

新傾向 関連資料との対応をつかむ

光源氏は、養女として迎えたの人柄をしきりに褒め称える。妻のは、これまでの彼の色好みな振る舞いを思い出し、苦言を呈している。

　ただにしもすまじき御心ざまを見知り給へれば、思しよりて、「ものの心得つべくはものしⓐ給ふめるを、㋐うらなくしも打ち解け、①頼み聞こえ給ふらむこそ心苦しけれ」とのたまへば、「など頼もしげなくやはあるべき」とⓑ聞こえⓒ給へば、「いでや。我にても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心ざまの、思ひ出でらるる節々なくやは」と②微笑みてⓓ聞こえ給へば、あなと思ひて、「③うたても思しよるかな。いと見知らずしもあらじ」とてわづらはしければ、㋑のたまひさして、心の中に、人のかう推しはかり給ふにも、いかがはあべからむと思し乱れ、かつはひがひがしうけしからぬ我が心のほども、思ひ知られ給うけり。

* 語注

ただにしも思すまじき御心ざま＝光源氏の色好みな振る舞いをいう。

あな心疾と思ひて＝ああ、察しのよいことよと光源氏は思って。

いかがはあべからむと思し乱れ＝「どうすればよいだろうかと光源氏は玉鬘の今後について思い悩みなさり」の意。

【原文】

　ただにしも思すまじき御心ざまを見知り給へれば、思しよりて、「ものの心得つべくはものし給ふめるを、うらなくしも打ち解け、頼み聞こえ給ふらむこそ心苦しけれ」とのたまへば、「など頼もしげなくやはあるべき」と聞こえ給へば、「いでや。我にても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心ざまの、思ひ出でらるる節々なくやは」と微笑みて聞こえ給へば、あな心疾と思ひて、「うたても思しよるかな。いと見知らずしもあらじ」とてわづらはしければ、のたまひさして、心の中に、人のかう推しはかり給ふにも、いかがはあべからむと思し乱れ、かつはひがひがしうけしからぬ我が心のほども、思ひ知られ給うけり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

紫上は、光源氏の色好みを思い出して〔　　　　〕ながら思いを述べ、光源氏は早々に話を切り上げる。光源氏は、玉鬘の処遇に思い悩む一方で、自らの〔　　　　　　〕心の内を悟る。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（終止形でよい。）〈３点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ〜ⓓの敬語について、敬意の対象を選べ。〈１点×４〉

ア　光源氏　　イ　紫上　　ウ　玉鬘

　ⓐ〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕　ⓒ〔　　　〕　ⓓ〔　　　〕

問四　チェック問題　［敬語②　二方面への敬語］

次の傍線部は誰から誰への敬語であるかを答えよ。〈１点×４〉

１　宮の御前に、ののア奉りイ給へりけるを、…　　　　（枕草子）

２　皇子のたまはく、「命を捨てて、かの玉の枝持ちて来たる、とて、かぐや姫に見せウたてまつりエ給へ」と言へば、持ちて入りたり。（竹取物語）

　ア〔　　　　　〕から〔　　　　　〕　イ〔　　　　　〕から〔　　　　　〕

ウ〔　　　　　〕から〔　　　　　〕　エ〔　　　　　〕から〔　　　　　〕

問五　傍線部①について、

⑴　現代語訳せよ。〈５点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

⑵　紫上がこのように述べる理由として最も適当なものを選べ。〈７点〉

ア　光源氏の色好みをうまく利用し、巧みに取り入り養女として生活する玉鬘に対して、軽蔑の念を抱いたから。

イ　光源氏の色好みな心情に気づきながら、嫌な気持ちにならず、ひたすら彼のことを信じる玉鬘を哀れに思ったから。

ウ　妻である自分の気持ちも考えず、光源氏の愛情を素直に受け入れる玉鬘の遠慮の無さに、不満を覚えたから。

エ　玉鬘に対する光源氏の好意に気づき、非難するとともに、彼を信頼しきっている玉鬘に同情したから。

　〔　　　〕

問六 傍線部②に込められた紫上の心情を一つ選べ。 〈４点〉

ア　卑下　　イ　絶望感　　ウ　皮肉　　エ　満足感

〔　　　〕

問七　傍線部③とあるが、光源氏は紫上がどのようなことを推察したと言っているのか。二十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈５点〉

ア　紫上は、光源氏を頼りがいのある人間と評価している。

イ　光源氏は、紫上から受けたい仕打ちを思い出している。

ウ　紫上は、光源氏の邪推を厄介なものだと感じている。

エ　光源氏は、自らの感心できない心のさまを自覚している。

〔　　　〕

問九　 紫上と玉鬘には多くの共通点があると考えられている。次に挙げる【資料】を読み、その内容を踏まえた【会話文】のうち、適当でないものを一つ選べ。〈５点〉

【資料】

光源氏は紫上を引き取り、娘のように大切に世話をしていた。やがて、紫上が成長した頃、光源氏は強引に紫上と契りを結んでしまう。翌朝、光源氏から紫上のもとに文が届けられる。

　引き結びたる文、御枕のもとにあり何心もなく、ひき開けて見たまへば、

　　あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れしよるの衣を

と、書きすさびたまへるやうなり。「かかる御心おはすらむ」とは、かけても思し寄らざりしかば、「などてかう、心憂かりける御心を、うらなく頼もしきものに思ひきこえけむ」とあさましう思さる。

【会話文】

ア　生徒Ａ―妻である紫上と養女である玉鬘の共通点といっても難しいね。一つは光源氏の色好みの対象になっているということかな。【資料】では光源氏は紫上に自分の思いを和歌にして伝えているし、本文でも、玉鬘に対して「ひがひがしうけしからぬ」思いを持っているということみたいだし。

イ　生徒Ｂ―それだけじゃないよ。本文で光源氏のことを玉鬘が「うらなくしも打ち解け、頼み聞こえ給ふらむ」と紫上は推測している。これは、この【資料】で紫上が光源氏のことを「うらなく頼もしきもの」と思っている部分と対応しているんじゃないかな。

ウ　生徒Ｃ―なるほどね。紫上も玉鬘も光源氏を信頼できる人だと思っていたんだ。でも【資料】で紫上は、光源氏からの愛情は「心憂かりける御心」だったと言っている。これは光源氏の色好みな一面を知ったことでの思いだな。紫上はただ無邪気だった自分を「あさましう」と言っているんだ。

エ　生徒Ａ―光源氏が色好みな性格で、紫上への思いを募らせていたことは、【資料】の「あやなくも…」という和歌からも読み取れる。父親として信頼していた男性からこんな裏切りを受けたら、本文に描かれているように男性不信に陥るのも無理はないね。

オ　生徒Ｃ―本文で紫上が玉鬘のことを「心苦しけれ」と思うわけだ。光源氏の「もの思はしき折々ありし御心ざま」こそが【資料】での「かかる御心」になるんだからね。こういった過去の経験を踏まえて、紫上は光源氏を批判しているんだね。この後の光源氏と玉鬘との関係が気になるところだね。

〔　　　〕

【解答】

問一　微笑み／けしからぬ

問二　㋐＝隔て心がない　㋑＝おっしゃりかけてやめる〈３点×２〉

問三　ⓐ＝ウ　ⓑ＝イ　ⓒ＝ア　ⓓ＝ア〈１点×４〉

問四　ア＝作者から宮

　　　イ＝作者から内の大臣

　　　ウ＝皇子からかぐや姫

　　　エ＝皇子から翁〈１点×４〉

問五　⑴　頼り申し上げなさっているだろうことが気の毒だ。〈５点〉

　　　⑵　エ〈７点〉

問六　ウ〈４点〉

問七　自分が玉鬘に恋心を抱いているということ。（20字）〈10点〉

問八　エ〈５点〉

問九　エ〈５点〉

【現代語訳】

何事もなくはお思いにならないだろう（光源氏の）ご性格を（紫上は）見知っていらっしゃるので、思い当たりなさって、「（玉鬘は）分別はおありでいらっしゃるようなのに、すっかり隔て心がなく打ち解けて、（あなたのことを）頼り申し上げなさっているだろうことが気の毒だ」と（紫上が）おっしゃるので、「どうして頼りないようであろうか、いや頼りがいはあるはずだ」と（光源氏は紫上に）申し上げなさると、「さあ（どうでしょうか）。私にしてみても、同じく耐えがたく、思い悩んだ時のあった（あなたの）お心のさまが、自然と思い出される節々がないことがあろうか、いや思い出すばかりだ」と微笑んで（紫上は光源氏に）申し上げなさるので、ああ察しのよいことよと（光源氏は）思って、「嫌なこともお気づきになることよ。（玉鬘は）あまりわからないことはないだろう」と思って厄介なので、おっしゃりかけてやめて、心の中で、人〔＝紫上〕がこのようにご推察なさることにつけても、どうすればよいだろうかと（光源氏は玉鬘の今後について）思い悩みなさり、また一方では非常識で感心できない自らの心の程も、自然とおわかりになるのであった。

【資料】現代語訳

結んだ手紙が、お枕元においてあり（、紫上が）何気なく、開いてご覧になると、

　　わけもなく長い間何でもない間柄でいたことだなあ。幾夜も幾夜も慣れ親しんできた仲なのに。

と、（光源氏が）お書き流しになっているようである。（紫上は）「このようなお心がおありだろう」とは、まったく思いもよりなさらなかったので、「どうしてこう、嫌なお心を、疑いもせず頼もしいものと思い申し上げていたのだろう」と情けなくお思いになる。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「など頼もしげなくやはあるべき」（３行目）を現代語訳せよ。

問２　「思ひ出でらるる節々」（４行目）とあるが、紫上はどのようなことを連想しているのか。最も適当なものを選べ。

ア　光源氏がかつて様々な女性と恋仲であったこと。

イ　光源氏が現在玉鬘とただならぬ関係にあること。

ウ　玉鬘の母がかつて光源氏と恋仲にあったこと。

エ　玉鬘の結婚相手がなかなか決まらないこと。

【補充問題解答】

問１　どうして頼りないようであろうか、いや頼りがいはあるはずだ

問２　ア